

# 交流文化

立教大学観光学部編集

2018.  
volume

17

17  
交流文化



特集  
景観



特集  
景観

立教大学観光学部

交流文化 17 ©2018  
立教大学観光学部

ISBN 978-4-9905878-3-3

# 2018年度 立教大学観光研究所 公開講座

立教大学観光研究所では、  
以下の公開講座を実施しています。

## ホスピタリティ・ マネジメント講座

宿泊を中心とするホスピタリティ産業の  
理論と経営、最新動向を学ぶ

(2018年9月開講12月講義終了予定)

「ホスピタリティ・マネジメント講座」では、ホテル  
や旅館など宿泊を中心とするホスピタリティ産業  
のサービスや運営、経営に関わることから、それを  
取りまくホテル資産投資、旅行会社や鉄道、航空  
業界の動向、MICE、観光地開発、急増するインバ  
ウンド等観光立国としての政策といった分野まで、  
業界の第一線の実務家を講師に招いて講義を行  
います。



最新情報はホームページをご覧ください。  
<http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/it>

「ホスピタリティ・マネジメント講座」  
に関する問い合わせは

立教大学観光研究所事務局  
〒171-8501  
東京都豊島区西池袋3-34-1  
TEL 03-3985-2577  
Email: kanken@rikkyo.ac.jp

# 立教大学観光学部

観光学科 / 交流文化学科

立教大学観光学部は観光学科と交流文化学科の2学科体制で  
す。フィールドを世界に拡げ、リアリティに満ちた学びの場を  
提供するオンリーワンの観光教育を目指します。



立教大学観光学部  
〒352-8558  
埼玉県新座市北野1-2-26  
TEL 048-471-7375

学部の紹介や入学案内については

<http://www.rikkyo.ac.jp/tourism>

特集

## 02 景観

## 04 景観

土地の相貌を求めて

小野良平

## 16 借景

人工與自然的聯繫

周宏俊

## 26 パリの景観観察ノート

松村公明

## 34 「交流文化」フィールドノート⑩ 「体験交流型観光」に取り組む 現場から学ぶ

豊田三佳研究室

## 42 読書案内 『フンボルトの冒険 自然という〈生命の網〉の発明』 『出来事と写真』

## 44 在外研究通信10 ヴァーヘニンゲン大学と ゲストハウスでの日常生活 韓志昊



# 「特集」 景観

「観光」の英語訳は、行政や学問的立場では主として「Tourism」が使われる。しかし辞書をあたってみれば、つまり世間で広く使われる言葉としては、観光の訳は「Sightseeing」の方が一般的である。この「観光」と「Sightseeing」を見比べてみると、「観光」が英語などから翻訳して生み出された語ではないのにも関わらず、両者の言葉の成り立ちはとてもよく似ている。どちらも眼に入ってくる世界を「見る（観る）」ことを基本としている。こうしてみると、時代とともに観光の内容や形態は変化するなかで、近年ではいわゆる物見遊山の観光は減っているとはいわれ

るが、それでもなお「観る」とは観光において重要で根源的な体験といえるのではないだろうか。

この「観る」ことに基づいたその体験や対象を示す概念として「景観」や「風景」がある。これらは特別な説明の必要もないほど日常的に使われる言葉とはなっているが、それだけに観光における観ることの意味も、意外と簡単に済まされているくらいがある。そこで本号では「景観」を切り口に観光を考えてみたい。まず「景観」の概念そのものの成り立ちに一度立ち戻って、観光と景観との関わりを考える。これで特に際立った景観が観光の対象として意識されるような例として、「借景」をとりあげ、日中の文化交流という観点も交えながら紹介する。最後に、観光の体験を豊かにする楽しみ方の一つの例として、都市や地域を読み解くための手掛り・手段に「景観」を用いるがらりの街を歩いてみる。

# 景観 土地の相貌を求めて

文・写真 小野良平

近年「絶景」という言葉がメディアにあふれ、「インスタ映え」は2017年の流行語大賞にまでなった。これらは「観る」ことに関わる流行の断片であるが、観光の本質にも関わる、「観る」ことを通した体験を概念化した「風景」や「景観」の、その原義は広く共有されているわけではない。このことをふまえたうえで、人の体験や身体性を含めた総合的な景観論の可能性を考察する。

ているようである。従来のインスタントカメラもその場で写真が共有できるツールであるといえるが、あらかじめ「その場」を超えた世界を意識しながら風景へスマホをかざす視線（写真）は、これまでになかったものである可能性はある。

このような軽々とパケット化されていくとでもいふべき風景の体験を止めることはできないしその必要もないだろうが、ただし学術的立場では、こうした現象を捉えておく意味はあるように思われる。しかしたとえば観光学における「風景」の扱いもまた、消費される風景、風景の政治性といった風景の「表象」の使われ方に関する批判的議論か、あるいは観光地の看板・電線・ゴミ問題など環境の「表層」の話などの、「オモテ」の話に収まっているように思われる。観光の語源に戻るまでもなく、「観る」ことを通した体験を概念化した風景や景観は、観光の本質にかかわることと思われるものの、意外にも観光学の中で風景や景観それ自身に関する議論を聞くことは少ない。しかし景観工学者の中村良夫がいうように風景が「空間に包囲された生命の実存的不安を解消する」、「社会の余剰価値といたったのんきな性質のものではなかった」、

# マ

スツーリズムを省みる中で、オルタナティブ／サステナブル・ツーリズムが唱えられるようになって久しい。その具体的形態はきわめて多様化しているが、総じてはモノからコトへ、一方的体験から双方方向のコミュニケーションへなど、体験の質を重視し地域をじっくり味わうような観光への志向が続いている。その中では当然ながら、景色を一瞥して写真を撮って済ませるような観光は、表面的に風景を消費する、旧態の遅れた観光として捉えられがちであるように思われる。

その一方で、これとは対照的に思われる動向も見受けられる。近年「絶景」という言葉が少なくもメディア上にはあふれ、TV番組表をみれば毎日必ずどこかの番組で使われており、また「死ぬまでに行きたい絶景○○選」のような出版物も多数世に出されている。そ

れらの中には従来知られる観光地も少なくないが、あれもこれも絶景というのは景色の安売りであるうし（実際に番組制作の低予算化とも関わるように思われる）、ウェブや印刷の写真は彩度などをドーピング気味に持上げた加工が施され、風景は「盛りれ」ている。

さらには2017年の流行語となった「インスタ映え」に加え、「フォトジェニックな景色」という表現もよく耳にする。「フォトジェニック」といえば従来は人に対して用いられる表現であったのが、インスタグラムなどのSNSに上げるのに適した写真映えのする風景、というニュアンスも持つようになったようである。スマートフォンでカメラの使われ方が変容し、風景に限ったことではないが、写真を通して瞬時に自己を表現し他者とつながることができそうという、コミュニケーションの道具としての写真の意味が増し



国営ひたち海浜公園「みはらしの丘」2017年5月（写真1） 提供：国営ひたち海浜公園 ひたち公園管理センター

のだとすれば、観光においても風景・景観は重要な主題となるはずである。

## 「景観」という概念

そこで改めて風景・景観の概念を整理しておきたい。そのためには「景観」という語の成り立ちを知ることが助けになる。というのも「景観」は日本語としてオリジナルに創案された近代の造語であり（漢語ではない）、そこに込められた意味が確認できるからである。創案者は植物学者の三好学（1861-1939）である。三好は植物生理学を修めにドイツに留学するが、専門を学ぶ傍ら強く感化を受けたのはかの近代地理学の祖、アレクサンダー・フォン・フンボルト（1769-1859）の思想であった。壮大なフンボルトの仕事の一つの特徴は、自然を科学者と詩人の双方の眼で全体的な「Physiognomy（相貌）」として捉えようとする視点である。

フィジオノミーという語は、辞書にも載っているように「人相」という意味ももつ。あくまで人の顔のオモテを観ながらその内面まで捉えようとする言葉である。フンボルトは人の人相に相当する、自然のいわば「地相」を捉えようとしていた。現在「人相」に科学

的客観性があると考える人は少ないように、フンボルトの後の時代の学問は詩人の立場を捨て、科学者に徹していくこととなるが、この野望というべきフンボルトの思想に強く惹かれたのが三好であった。三好が植物学者として、植物の生育の広がりである物的空間（生）の総体とその印象を含む眺め（風景）の双方を合わせてこれに「景観」という名を与えたのが明治35年（1902）のことである。フィジオノミーに近いがしかしその訳語としてはなく、独自に創案した言葉であった（図1）<sup>2</sup>。

これは植物生理学者であった三好の専門とはやや離れた内容であったためか、三好が「景観」を必ずしも学術用語として規定しなかったことや、後の学者の誤解なども影響し、その後の「景観」は三好の意図とは異なる形で使われ現在に至っている。三好が二つ合わせて表現しようとした概念がそれぞれの意味で切り離され、同じ「景観」という言葉で使われることとなったのである。すなわち（植生を一般化した）領域的・地域的空間の広がり（「景観」と称する地理学や生態学と、眺め（風景）を「景観」と称する土木・造園等の工学分野である。前者は客観的かつ物的存在とし

て、後者は主観を持った人の体験である現象としてそれぞれ景観を位置づけるのが基本的立場だが、現代ではそれぞれの分野の一部が相互乗り入れもしながら「景観」を使うため、かなり込み入ったこととなっている。後者を「風景」とすれば言い分け可能ではあったが、風景という言葉は比喩的表現も含め幅広い意味を持ったため、また学術的には眺めという主観的体験にも一定の客観性（間主観性ともいえる）を想定することから、「景観」も多く用いられる。さらにはこうした二つの立場の系譜とは必ずしも関わりなく、新たに「景観」を扱う分野も現れ、「景観」概念は混迷の中にあるともいえる。

さまざまな立場がそれぞれ同じ「景観」を使うことが、結果として三好の意図に過っているという見方もあるかもしれないが、実態としては異なる立場の存在に気付くことなく景観を論じている傾向が強く、特にたとえば観光学のような多様な分野が集まる学際の場合において、景観という言葉が使われながらもその意味が共有されずに話が通じてない事態にもなる。景観に関わる諸分野において現状としては三好の視点自体が知られていないに等しいが、当面は景観には二つの立場による



三好学『日本植物景観』1905より「やまざくら並に森林の景観 大和吉野」(図1)

意味の違いがあることを常に留意した議論が求められる。なお、現在の「景観」に対応する英語の landscape や独語の Landschaft は、概ね景観と同等に「土地の領域」と「風景」の二つの意味を古くから持ち、使う立場による意味の相違は日本と同じような状況である。しかし二つの意味があること、それらにあってまとめた意味を与えることは異なり、それを試みたフンボルト・三好の視点はその後避けられてきたとはいえず、日本語の「景観」がそのためにあって創案されたユニークさをもっていたことは心に留めておきたい。

## まなざし論と景観

今や観光学の基本図書の一つといえる、社会学者のJ・アーリによる『観光のまなざし』（原著1990）は、観光学においては必ずしも景観や風景を主題としたものとは位置づけられていないが、基本的な視覚の問題を扱った本書の内容は、景観論といって差し支えない。冒頭部に引用もあるためか、本書



ルネ・マグリット『人間の条件 (la condition humaine)』1933 (図2)

観として扱う地理学の中でそこに様々に入り込む「ものの見方」への議論が展開されることとなった。これはある意味で、先に触れた二つの景観論に相互浸透がみられることになった動きである。

ただ、「ものの見方」論はここだけで展開されていたわけではなく、たとえば農

村風景論者の勝原文

夫『農の美学』（1979）では「審美的態度」、あるいは文芸評論家の柄谷行人『日本文学の起源』（1980）<sup>7</sup>では「認識の布置」といった概念で、それぞれ同じではないが類する考えが示されていた。さらにいえば、既にシュールレアリストのR・マグリットの作品『人間の条件』（1933）<sup>8</sup>（図2）では、作者本人が「我々は世界をこのようにして見る」と解説までしてくれている。<sup>9</sup>この絵の中のキャンバスをスマホに置き換えればフォトジェニックな景色の解説にもなるで

あろう（写真1）。じっくり描く絵とワンタッチのスマホでは違うという見方もあるであろうが、どうやら我々はまさにこのようにしか世界を見ることができないのかもしれない。

このように観光のまなざし論の多くの部分は、観光学に関わる学術分野あるいはアカデミズムを超えた景観・風景の議論や創作でも関心を持たれてきた内容であるので、これを観光学としても展開させていく余地はいろいろあるように思われる。たとえば観光学におけるまなざし論は、ややシニカルな自身もまた「まなざし」として、観光者の行動や街並みの整備を論じる傾向にある。しかし社会的に構築されたまなざしを第三者的に観光者や街並みにみるというだけではなく、その生成の現場に入り込むことも可能ではないか。

たとえば、日本の文化財（文化財保護法）に、「名勝」という観光地とも深くかわるカテゴリーがある。これは大正時代に制度化され、現在も継続して指定件数を重ねているものである（写真2）。「名勝」の定義は法には書かれていないが、「名」は「名高い」、「勝」は「すぐれた景色」の意味である。名高い風景、つまりその時点までの高い社会的評判（「まなざし」として価値付けられた風景であり、名勝

の指定とは、実際にはその土地・環境の保護であるが、本質はそのまなざしの再定義と公的認証にはかならない。名勝に限らず文化財に政治性、権力性をみるのはたやすい、がしかし一方で何も記念物を欲しない社会集団も珍しいであろう。そして実際には国家なる抽象的な主体が指定するのではなく、名勝の場合その対象に既に与えられている社会的評価をもとに、地元の自治体から文化庁までの行政やそれぞれに関係する団体や審議会等の人

間が関わって文化財という価値が与えられるのである。この現場における当事者達（アクターともいえる）が、自身の議論がまなざしの再定義であることを自覚しているかどうかは議論の深度にかかわることで、そうであれば彼ら自身がまなざし論に自覚的であることには大きな意義があり、まなざし論は実践の場にも活かし得る。

観光に関わり、文化財に続き昭和初期に制度化されたものとして、国立公園が挙げられ



1



2



3

1 特別名勝・松島 (写真2) 2 富士箱根伊豆国立公園 (写真3) 3 日光国立公園 (写真4)

る。日本の自然環境の中でどのようなところを国立公園として定めるかは、まなざしの問題そのものである。その際に、文化財は先に述べた通り従前のまなざしを再定義するのに対し、国立公園は国を代表する自然の風景として新しいまなざしが求められた。実際に当初選定された国立公園は、18-19世紀の西欧で登場した「崇高 (sublime)」な風景に価値を置くまなざしに影響を受けたと考えられ、火山系の山岳を中心としたエリアが多く選定された（写真3・4）。例えば、

松島は名勝には指定されたが国立公園とはならなかった。これはその選定にあつたまなざしの差にほかならない。そして国立公園もまた文化財同様、多様な人の関わりによりその指定や追加変更などが現在も行われており、その現場への関わりの可能性は同じことがいえる。

こうした名勝や国立公園は、観光地として戦前から戦後にかけての観光の一翼



重要伝統的建造物群保存地区・五箇荘金堂（滋賀県東近江市）（写真5）

「を担ってきたが、指定された当時の「現場」のまなざしがその後の観光者のまなざしを先導するとともに、発信者ともいえる現場のまなざしは当然ながら変化していく。もちろん発信者は公的なものに限らず多様にあり得るが、風景に関わるこうしたまなざしの変容に

関する議論も既になされている。たとえば先に挙げた勝原と、その考えを踏まえた文芸評論家の加藤典洋による審美的態度の変容に関する考察<sup>9</sup>は、近代以降の風景へのまなざし審美的態度<sup>10</sup>が、歌詠み、旅行者、定住者の態度へと変容してきたことを、具体的風景の対象（来訪地）とともに、まなざしの送り手と受け手の関係とメディアの役割も含めつつ大きな仮説として提示している。実際に、たとえば文化財の種別には昭和50年に「伝統的建造物群」が追加されているが、いわゆる歴史のまちなみを、定住者の審美的態度が注ぐまなざしの対象の一例と理解することは難しくない（写真5）。現代においては、ウェブが変えた情報社会の影響などを考えればこうした図式はもはや有効でない可能性もあるが、そのことも含めて風景へのまなざしの動態的な把握は、その第三者的「観測」から、現場での「制作・編集」にまで多面的に有用な作業であり、観光学はその議論にふさわしい場の一つといえる。

### 統合的な景観論の可能性

以上は三好の「景観」のうち、眺めや風景に関わる議論の観光学における展開可能性を考察したが、次いで三好の目指した土地・

空間の広がり眺めの統合へとつながる手がかりをつかんでみたい。関連する話題として挙げられるのは「文化的景観」の議論である。農林漁業等に関わって形成された、たとえば棚田などを典型例とする自然と人為の合作とされる景観である（写真6・7）。文化的景観は戦前期の地理学で既に掲げられていた概念で、自然に対する人為の働きかけの結果として現出している土地・空間の広がりを捉えようとするものであるが、1990年代に世界遺産の中で改めて着目されるようになり、その後日本国内の文化財の一種別にも追加されることになった。そもそもの考え方に沿えばおよそほとんどの環境は文化的景観といえるが、これが世界遺産として文化財となるにあたって、他から際立った存在とみなし得るには眺め・風景としての価値も少なからず求められることとなる。従って文化的景観は一応、土地の広がり眺めの双方の観点で捉える景観であるといえそうである。

きた人々とは異なる別の外部の他者の視点である。その外部の視点は新しいまなざしの一環と見ればよく、名勝などに加えて新しい文化財の種別として文化的景観を設けることは、たとえば加藤のいう定住者の審美的態度の登場に伴うまなざしの変容に過ぎないという考えられることもできる。三好自身の景観概念にはこのまなざしに類する関心が希薄であったが、先に述べたような観光学等における風景へのまなざし論を経ることで、三好の目指した景観概念には土地の広がりに関わり、またその

眺めに関わる人、主体についての議論が不足していることに気づかされる。従って文化的景観という概念に沿うならば、人為を与えてきたその人々が自身の面する環境をどのように観てきたのかということが本来問われるべき点であるといえる。そのためには歴史性を考慮した空間の履歴を踏まえた上で、眺めの主体である人がその対象となる土地・空間に何らかの形で関わる身体をもつた同じ人であること、つまり人の身体性の観点から景観を考えることである。先のアーリ

の「観光のまなざし」においても、その増補改訂版においては、視覚中心主義への批判などにも応ずるかたちで、身体性を考慮した新たな考察が加えられている。しかしここで考えたいのは、視覚以外の感覚と体験も重要であることは当然とはいえ、視

覚や景観の議論から離れることよりも、むしろあくまで観る主体としての人の身体性に着目することで、三好の「景観」に近づいてみることである。一例として、観光地ということではないが、海洋沿岸での地域の暮らしと海への眺めの関係を挙げたい。東日本震災で津波の被害にあった多くの沿岸集落の復興に関して、防潮堤の増強などによって暮らしの場から海が見えなくなること懸念する声は小さいものではない。実際にある沿岸域で海の可視性を地形情報をもとに網羅的に調べてみると、海岸から離れた高台に立地する集落やそれらを結ぶ道は、海の可視性の高い土地に特異的・限定的に立地していることがわかる（図3、写真8）<sup>10</sup>。さらにこれは海が生業の場である漁業集落はもちろん、沿岸域の農業集落においても一定程度みられる特徴である（写真9）<sup>11</sup>。つまり沿岸域で暮らしを営む棲み処を定める（身を置く）にあたって、海が見えるという単純な体験が生活に欠かせない、まさに先の中村の「生命の実存的不安を解消する」条件であったと考えられる。そうした海を見ながら生業を続け暮らしてきた人々の営為の履歴の表れが、その土地のそこに暮らす人々にとつ



上 重要文化的景観・娯楽の棚田（長野県千曲市）（写真6） 下 重要文化的景観・近江八幡の水郷（滋賀県近江八幡市）（写真7）





薩摩国一ノ宮杵間神社（鹿児島県指宿市）（写真10）

鳥取県の霊峰、伯耆富士と大山の中腹にある大山寺および大神山神社は、修験の場にはじまり天台宗の一拠点としての長い歴史をもつ山岳信仰の場である。現在は旅館や土産店が並ぶその参道は当然のように大山を直指して上がっていく。しかし興味深いことにその反対方向、つまり参道を下る際には、15km離れた美保湾と弓ヶ浜の美しい弧を正面

ての景観ということになる。海だけではなく、農地などの生産の場や集落など集住の場が相互にどのような「見る―見られる」関係にあるかなどを調べることで、生活者の視覚体験をその土地の空間的広がりに関連付けることが可能であり、統合的な景観を捉える手法として可能性がある。

さらにこうした「景観」を、現代ではやや

特異な身体性ととも体験できる場所がある。その典型が、日本の場合神社などに代表される信仰に関わる場所である。よく知られるように、神社のプロトタイプは磐座という言葉もあるように岩、山、瀧、巨樹など自然物を対象に、これを拜むという身体化とともに成り立ってきたものである。特に景観としての地域的スケールで成り立っているのは神体山と

よばれるような山を遙拝する場合である。大抵は眺めとしても特徴ある形の整った山が神体山で、これを背後に拜むように社殿が設けられた神社が少なくない（写真10）。さらに神社の場所からの周辺への眺めにも集落を見渡せるなどの局所の特徴がある場合もあり（写真11）、先の沿岸域のケースでは、集落全体としては海が見えにくくても、そのコミュニティの拠点といえる鎮守である神社に行けば海が良く見えるという例もある（写真12）。東日本大震災で、津波を免れた神社が多数存在し、その立地の知恵に注目が集まった。しかしこうした神社は単に高台にあるだけではなく、集落から見えると同時にそこからは自らの集落に加えて海を見るという、生活者にとっての景観としても特異な存在である。

最後に、観光地における例を紹介したい。



1 岩手県宮古市重茂地区笹見内集落（写真8） 2 岩手県洋野町長坂集落（写真9） 3 岩手県宮古市重茂付近における地形より解析した海の可視性（青色の濃度が可視性の高さを示す。ただし人の居住条件を考慮して土地傾斜10度以下の範囲）（図3）



明治神宮外苑2016年2月11日。旧国立競技場が取り壊され、新競技場の建設までの束の間に姿を現した富士山を見に来る人々。写真を撮る人が少ないわけではないが、富士山の景観はSNSの先よりも、現場に居合わせた人々の間で共有されていた。(写真14)

参考文献

- 中村良夫 (1982) : 『風景学入門』 : 中公新書
- 2 小野良平 (2008) : 『三好学による用語「景観」の意味と導入意図』 : ランドスケープ研究71 (5), 433-438
- 3 ジョン・アーリ (1995) : 『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』 : 加太宏邦訳、法政大学出版局 (増補改訂版2014) (原著Urry, J. "The Tourist Gaze", 1990.)
- 4 ジョン・バージャー (1986) : 『イメージ Ways of Seeing 視覚とメディア』 : 伊藤俊治訳、PARCO出版局 (原著Berger, J. "Ways of Seeing", 1972, Penguin Books)
- 5 スザンヌ・シーモア (2005) : 『風景の歴史地理学』、ブライン・グラム他『モダニティの歴史地理・下巻』 : 米家泰作他訳、古今書院 (原著 Graham, B. and Nash, C. "Modern Historical Geographies", 2000)
- 6 勝原文夫 (1979) : 『農の美学』 : 論創社
- 7 柄谷行人 (1980) : 『日本文学の起源』 : 講談社
- 8 S.Whitfield (1992) : 『Magritte: Metropolitan Museum of Art』
- 9 加藤典洋 (2000) : 『武蔵野の消滅』 『日本風景論』 : 講談社
- 10 小野良平 (2012) : 『生活の基盤となる景観の再生』 『復興の風景像』 ランドスケープの再生を通じた復興支援のためのコンセプトブック : マルモ出版
- 11 小野良平 (2017) : 『三陸沿岸域における集落と海の視覚的つながり』 ランドスケープ研究80 (5), 585-588

ないか、あつたとしてもまさに余剰価値を扱うにすぎない。しかし改めて景観について原義に立ち返ることで、誰かがそこに身を置き体験をする場としての環境を広く捉えてその価値を考え、それらの関係体の維持のあり方を議論することの意義に気が付かされる。観光資源や観光地の価値が自明のものでないこ

とはいってもないが、観光の多様化とともに、いわゆる観光地とそうでない地域との違いは区別がなくなりつつある中で、環境の価値をそこにおける人の体験も含めて統合的に捉えることは観光学としても取り組むべき課題ではないだろうか。

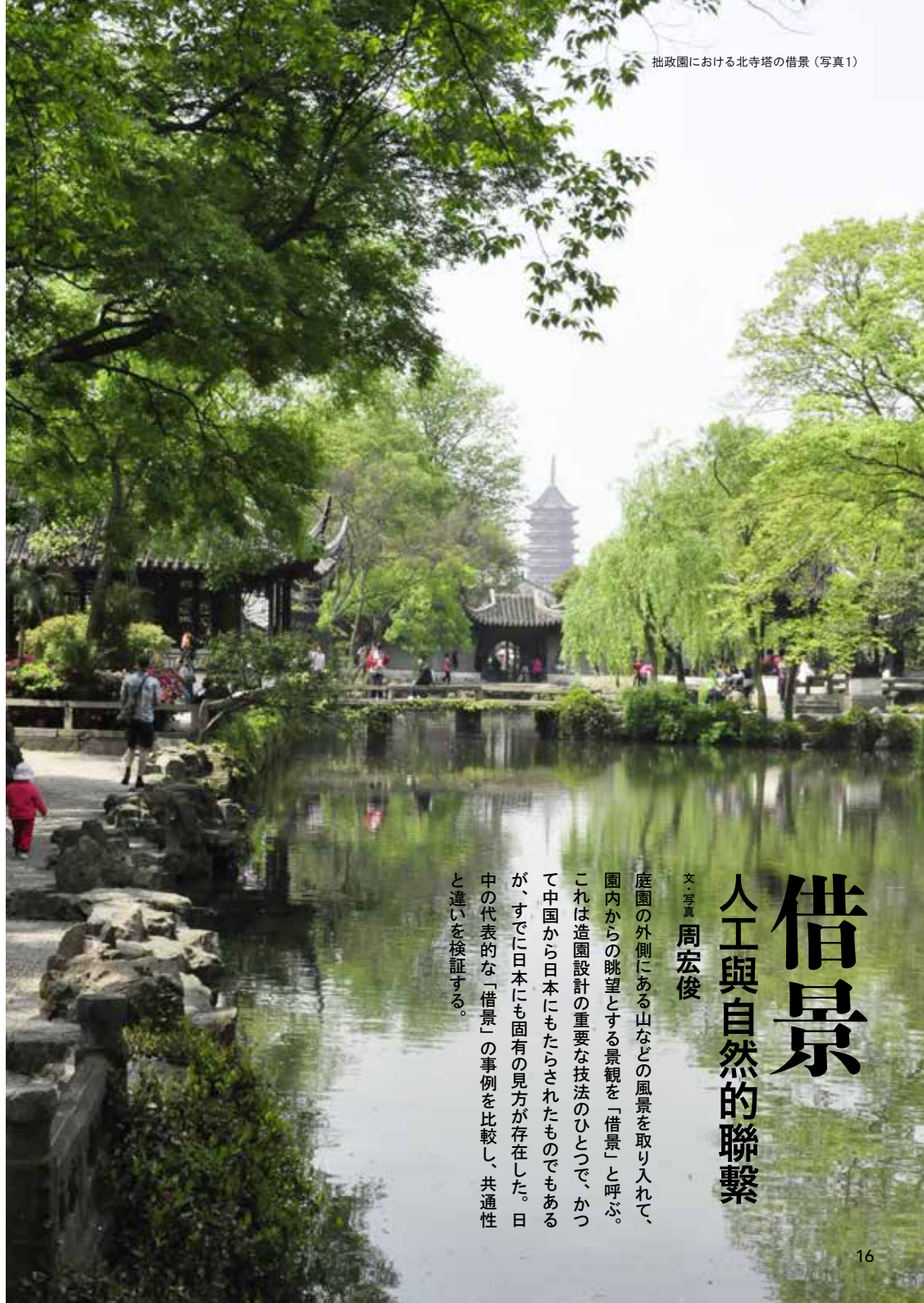
ファンボルトや三好の目指した「相貌」は本当に捉えることが可能なのかどうかは未だわからない。しかし時には、人々が風景を前にしながらも必ずしもインスタジェニクさに捕らわれているばかりではない場に出会うこともある(写真14)。そこで人々が体験している風景・景観は、「相貌」に少しばかり近づ



1 広島県世羅町・和理比売神社から見る世羅町(旧大田庄) (写真11) 2 宮城県気仙沼市・本吉寺沢愛宕神社からみえる海 (写真12) 3 鳥取県大山寺門前より美保湾と弓ヶ浜 (写真13) 4 鳥取県大山寺門前付近における地形より解析した大山山頂および美保湾(弓ヶ浜)への可視性(青色の濃度が、大山と美保湾への同時可視性の高さを示す) (図4)

に望むことができる(写真13)。これを周辺一帯の地形から解析してみると、大山山頂部と弓ヶ浜の双方を眺めることができるのは、この参道の付近に限られていることがわかる(図4)。つまり坂を上り下し、その重力を感じつつ山と海の双方を眺め、堂宇に詣でるといって濃密な身体性を伴った信仰を空間化しているのがこの霊場であり、それがそこ以外には成り立ち得ない場所に存在している。現代ではここを登山者、ハイカーも通って大山に向かう。このようにこの社寺をその一帯に留まらず、視覚的に繋がれた山さらには遠く離れた海まで含めた関係の中で、その門前に暮らす人々が日常的に、参詣や登山に訪れる人々等が非日常的に、それぞれに身を置いて体験する空間のまとまりとして理解するのが、景観としての捉え方といえる。

観光地においても、景観の保全などが取り組まれるべき課題とされることは多い。しかしその具体策として挙がる、建物の保存や高さ規制あるいは自然の保護に加えて看板や電線の処理などの、環境の表層部を整えることは景観保全の一部には違いないとはいえ、それだけであれば景観という概念はさほど必要



# 借景

## 人工與自然的聯繫

文・写真 周宏俊

庭園の外側にある山などの風景を取り入れて、園内からの眺望とする景観を「借景」と呼ぶ。これは造園設計の重要な技法のひとつで、かつて中国から日本にもたらされたものでもあるが、すでに日本にも固有の見方が存在した。日中の代表的な「借景」の事例を比較し、共通性と違いを検証する。

### 借景について

観光資源の定番の一つに「庭園」が挙げられるが、庭園とはその全体が「デザインされた景観」ということができるので、それは鑑賞対象であるばかりでなく、観光において人々が楽しめる景観のあり方へのさまざまなヒントを与えてくれる存在でもある。その多くは、閉じた世界の中に完結した風景・景観が設けられたものである。しかしその中には庭園の外側にある山などをその庭園の風景に取り入れたものもみられ、このようにして成り立つ景観は「借景」と呼ばれている。

この「借景」は、日本と中国の庭園における一つの重要な造園設計の技法として知られている。ただしそれは共通しながらも全く同一の技法ではない。中国ではその庭のさまざまな特徴の一つとして借景という要素を持つ庭園がみられるのに対し、日本では、借景はある庭の中心的主題として特化された、「借景庭園」という庭園様式として理解されている。こうした共通性と違いを知ることが、「借景」を通じた比較文化の観点からも興味深いものである。

借景に関する記述や描写は中国では古くは

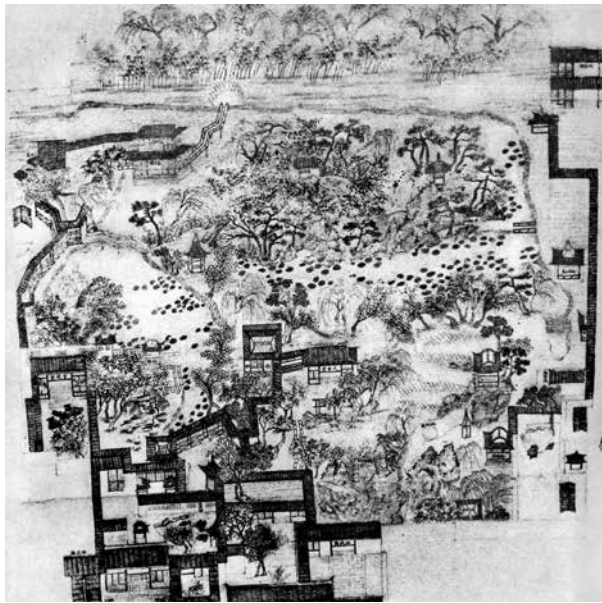
宋代からの文献にみることもできるが、近代になって造園学という学問が発展するようになって以降、借景に関する研究はさらに枚挙にいとまがないほど多くなっている。この中で、明代末（江戸初期）に書かれた『園冶』<sup>えんや</sup>は中国唯一の造園技術専門書として知られ、中国庭園において最も重要な文献という地位を占めている。同書の中で借景は、「園雖別内外、得景則無拘遠近（訳…庭園に内と外の区別があっても、遠近を問わず景をとり入れること）」として基本的特質が説明され、「夫借景、林園之最要者（訳…借景は庭園にとって最も重要）」という位置づけを与えられている。また同書では全体構成の中の最終章のテーマとして借景が設定され、その理念や型などが詳しく記されている。

一方日本の庭園においては、「借景」は少なくとも言葉としては中国由来の舶来品である。近代の造園研究者として知られる小沢圭次郎（1842-1932）は、借景を日本語の「見越し」と対応させて論じた。その相応関係について、小沢は「凡ソ園治ノ方略ニ於テ、天工人為ヲ湊合スルニ、両様ノ別有り、一ハ天景ヲ借リテ、人工ヲ資クル者トシ、一ハ人工ヲ加ヘテ、天景ヲ粧フ者、前者ハ則チ

漢土ニ在リテ、之ヲ借景ト称シ、邦語ニテハ、之ヲ見越ト云フ、借景トハ園外ノ景物ヲ借リ来リテ、園中ノ眺望ニ供スルノ謂ナリ、見越トハ近ク眼前ニ見得ル所ノ景物ヲ超越シテ、其上端若クハ其間隙ヨリ、遠方ノ景象ヲ眺望スルコトニテ、俗ニ見越ノ富士ト云ヒ、見越ノ松ト云フノ類即チ是ナリ（現代文訳…造園の方法として、自然と人為の連携のさせ方には二通りある。一つは自然の景を借りて人為的景観の助けとする方法、一つは人為的デザインを加えて自然の景を整える方法で、前者のことを中国では借景、日本では見越しという。借景とは園外の景物を借りて園内からの眺望とするものである。見越しとは近くの景物の上または隙間に遠くの景を望むもので、見越しの富士とか見越しの松というものがその例である」と述べ、視覚上の境界に対する意識の違いを日中の造園における借景の違いとして指摘した。

### 日本と中国の造園における借景

小沢の説明からもわかるように、日本では「借景」という言葉が持ち込まれる以前からも借景に近い概念はあったようだ。実際たとえば平安末期の『今鏡』には、日本最古の（世界最古ともいわれる）造庭書である『作



1901年の八旗奉直會館図（劉敦楨『蘇州古典園林』より）（図1）



天候に影響される（写真2）



清代錢維城「弘曆再題寄暢園詩意图」（黃曉より）（図2）

「庭記」の著者とされる橋俊綱（藤原頼通の子）が、白河上皇との会話の中で、「地形」と「眺望」を名園選考の基準としたというようなエピソードが記されている。そこに示されているのは、日本の自然環境における山地に富む地形的特徴と、その影響を受けた作庭法の要点であるということが出来る。これを中国庭園の場合に照らして考えれば、「地形」を重んずるのは「相地（土地の特性を読みとること）」、「眺望」は「借景」と理解しても良いだろう。

中国において現存する庭園の中で最も有名な借景は、蘇州市の拙政園における北寺塔の借景ということが出来る。明代正徳年間（1505-1521）に建造された拙政園は古くから名園の誉れ高いが、現在みることで出来る園内の空間レイアウトと様式は19世紀末に至ってから形成されたものである（図1）。北寺塔は拙政園の西に1kmほど離れたところにある。園内の池は東西方向に長く伸びており、東側には「吾竹幽居」と「倚虹」の二つの亭が立っている。両者の中間に立つて、広々とした水面を見越すと、北寺塔が見える（寄暢園の借景（写真1）。このシーンは天候に影響されやすく、塔が見えない場合も少なくないため、そのことによりかえってより

心を打つ風景というような評価が与えられてきた（寄暢園の借景（写真2））。

このように、拙政園から北寺塔を眺望する視点は、ある特定の建築物等に限定されているのではなく、この意味では借景はそれほど重視されなかったようにも思われる。これに対して、滄浪亭という同じ蘇州にある宋代の庭園では、町の西南方向にある遠山を眺めるために、園主は明確な意図をもって、築山の上に文字通り「看山樓」という名を与えた二階建ての楼閣を建てた。残念なことに、その「看山」の視線はすでに都市の現代化につれ、遮られるようになってしまった。

これらの二つの庭園の借景は、都市内に立地することにより得られた、庭園の外側にある対象との単なる視覚的繋がりにすぎない。これに対して、郊外に立地し山林に囲まれる「寄暢園」の場合は、周辺全体の地形を基本とした環境の特性が把握された上で庭園の借景が実現されていると思われる。蘇州の隣町である無錫の西郊には、「惠山」と「錫山」の二つの山が近接して存在するが、明代に建造が始められた寄暢園はまさにその両者の中間にあたる惠山の麓に、庭園が取り囲まれるような形で立地している（図2）。寄暢園では



修学院離宮の借景（写真4）



修学院離宮の地形（Google Earthより）（図3）



寄暢園の借景（写真3）

を視覚的に遮蔽し、山の雄大さをいっそう浮き彫りする効果を出していることがわかる。

二つの借景の形式：「眺望」と「框景」

拙政園と滄浪亭のような中国の庭園の借景は、まさに「園冶」が述べる「極目所至、俗則屏之、嘉則收之、不分町疃、盡為煙景（見渡せる限り、俗なものであれば遮り、美しければそれをとり入れる。また、田園か町かを分けずに、すべて風景と見なす）」という内容に当てはまっている。中国では借景を楽しむ方法は、大抵の場合、高い場所あるいは広い場所から遠くの景色を眺めることである。それに対して、京都の円通寺庭園のような日本の借景は、小沢圭次郎のいう「見越し」理論あるいは視覚上の境界の存在によって成り立っている。視覚上の境界物によって構成されたいわば額縁のような存在は、借景の構図に対する重要な要素となつて、画面のように捉えられる景観の深度と奥行き感に影響している。奈良の慈光院庭園の借景もそのような要素と特徴を現している（写真6）。

これらの借景を成り立たせる庭園空間の構成とそこにおける鑑賞者の身体の関係に注目してみると、中国と日本とは異なる特徴が

地形の特性を全体的に捉える「相地」が行われ、恵山の麓の傾斜を利用し、さらに麓の上に大きな築山を建てることによつて、山林風景の「意境（注：「境地」に近い意味）」を強化するようなデザインが工夫されていることを窺うことができる。目を転じれば、「嘉樹堂」の近くに立ち、「錦匯漪」という池を見越しながら、「錫山」及び「龍光塔」の借景を目に入れることができる（図5）。

中国の庭園に対して、日本の借景庭園においては、「相地」と「借景」、あるいは「地形」と「眺望」の関連は、より明確に読みとることが可能である。すなわち、日本庭園の借景は、地形の特性の全体的な把握と検討に基づいて設計されていることがわかりやすい。たとえば京都の修学院離宮の上御茶屋庭園、円通寺庭園、あるいは奈良の慈光院庭園などはいずれも日本らしい借景の典型であるといえる。修学院離宮上御茶屋では比叡山の西麓の中腹に、地形に沿つて長さ200mにおよぶ堰堤が築造され、谷川を堰き止めた「浴龍池」と呼ばれる広大な人工池が設けられた。堰堤の最上部にある大刈込がきれいに整えられ、高所の視点となる「隣雲亭」から浴龍池と視覚上の境界（見切り）となる刈り込



円通寺の借景（写真5）

みを見越せば、延々と起伏の連なる山々を見ることが出来る。人工池の堰堤と刈り込みがその外側近くに広がる土地の風景を遮る一方で、水面は遠景と空を反射して倒景（上下逆さになった景観）をなし、絶景が生み出されている（図3・写真4）。

円通寺庭園は主要となる建築物に付属する枯山水式の庭園に属し、面積は600㎡余りに過ぎない。やや長方形の形をした庭の中に目にするのができるのは、一面に生えている緑の苔、いくつかの庭石と刈込だけであり、ほかには何も無い。直方体に整えられた低い刈り込みは庭の境界線となり、視覚上の見切りとしても非常に目立っているが、力強く伸びる松や杉の木とともに、天然の「額縁」が組み立てられている。その額縁は、雄大な比叡山と向き合い、方丈建築からの借景の鑑賞を助ける道具となつている（写真5）。

円通寺周辺を含む全体的な地形の特性を分析してみると、円通寺庭園はなだらかな斜面の降りていく途中に立地し、これに向き合うようにして立ち上がる比叡山を眺める構成となつている。このように視点と対象の間の地形が凹型になっていくところに庭園の境界線を設置することによつて、比叡山以外のもの

ある。中国的な「眺望」に近い借景の形式は、「登高眺遠（高いところに登つて遠くを眺める）」という庭園での体験として表現することが可能であり、この体験には身体性の変化と視線の広がりとの関係性がみられる。すなわち、高所の視点に上がつていき、そこに到達して遠景を眺望するようになっていくところに特徴があり、ここにいわゆる「小後見大（小さな



慈光院の借景（写真6）

空間を経てその後に広大な眺めを得る」の空間理念を見出すことができる。たとえば滄浪亭の「看山楼」は築山に建てられており、「小後見大」の典型例といえることができる。それに対して、日本型の借景にはいわゆる「小中見大」という造園理念がみられずなわち「小さな空間の中に身体を置き、そこから「大」きな自然を望む意匠ということが可能。円通寺庭園で見れば、小さな庭園を前にした小さな方丈から視線を遠くまで渡し、雄大な比叡山を借景するという構成になっており、こ

在すること、額縁に入った絵画を見るような効果とともに捉えられる景観である。蘇州庭園のような中国庭園は都市内に立地する中で、庭園外の風景は多くは取り込める存在ではない。また庭園内部の空間は常にいくつかの部分に区画される。さらに、その空間を区画する主要手段あるいは重要な景観要素はまさに建築物そのものである。このような庭園構成上の要因もあって中国庭園では框景の構造が形成されやすい。

拙政園の「晚翠」は蘇州庭園における框

れは「小中見大」の典型といえることができる。

中国庭園において、このような日本の借景の形式は「框景」呼ばれる概念から理解することも可能である。「框景」とは庭園内の各スポットや建築の間に相互に「見る一見られる」の視覚関係が築かれ、さらに建築物との組み合わせによって窓枠のような存在が介

景の代表であるといっても過言ではない（写真7）。晚翠は拙政園枇杷院の白い扉にある円形洞門の名前である。枇杷院の中に立つて、晚翠を通して見れば、ちょうど築山の上に立っている「雪香雲蔚亭」と向き合うことができる。芝圃の「浴鷗」も同じような構成で、景観として非常に優れた視覚効果が得られる（写真8）。以上は内部の扉にある円形洞門を利用した框景の例であるが、「網師園」の「濯纓水閣」のように建築本来の一部分が額縁とみなされるような框景の類型もある。「濯纓水閣」の内部から外を望めば、建築の障子、屋根と手すり、完全に額縁を組み立て、「月到風来亭」と「竹外一枝軒」とともに美しい画面的な景観が構成されている（写真9）。「濯纓水閣」の框景は円通寺庭園と同じように視線を正確にコントロールする原理から成り立っている。ただしもちろん日本の借景庭園の場合、これまでに述べたように框を構成するものは建築の軒などの一部や刈込であったり樹林であったり、框を通して見る対象は庭園の外の自然である点など、中国庭園とは異なる点も少なくない。

### 借景が繋ぐ人工と自然

たびたび触れた小沢圭次郎が述べているように、借景は自然と人工の入り交じった景観を意味するが、それは庭園のみに存在するだけではなく、町、特に古い町にもスケールの大きな借景というべき景観的特徴がみられる。町に暮らす住民が郊外の山の景を享受する眺望を得ることができることは、自然と町を融合しようという念願と理想の表れであるとも

することもできる。

古い町である蘇州は中国江南平原の水郷地帯に位置し、西や西南方向に十数km離れたところに山が多く存在する。しかし宋代の「平江圖」をみると、これらの山はまるで町に隣り合っているように描かれ、非常に近い存在として捉えられている（図4）。詩文で描かれたものを探してみれば、清代徐松は『百城煙水』に蘇州城内の風景と名勝について詳しく記述しており、たとえば「鼓角聲沉絲管沸、

捲簾晴黛遠山低（訳…戦の鼓や角笛の音は低く、音楽はにぎやかになって、簾を開けて、遠い山の風景を取り入れる）」など、町から遠い青山を眺める描写も珍しくない。また、同じ古町である常熟はより典型的な例であり、山を直にまわること町の一部分として取り入れたような特徴をもっている。城壁は虞山の地勢に沿って設置され、「十裡青山半入城（訳…大きな山の半分ほどが城壁に含まれる）」と形容されるような都市のレイアウトが形成された。日本の都



1



2



3

1 拙政園における「晚翠」（写真7） 2 網師園における「浴鷗」（写真8） 3 網師園における框景（写真9）



2



1



4

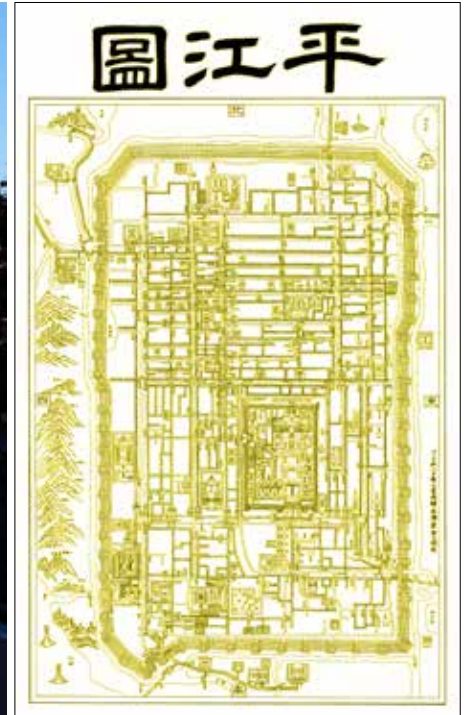


3

1 水の教会 (<http://risonare.com/tomamu/summer/>) (写真11) 2 豊島美術館 (<http://benesse-artsite.jp/art/teshima-artmuseum.html>) (写真12) 3 丘の「ビューファインダー」(<http://www.gooood.hk/viewing-pavilion-on-hill-tao.html>) (写真13) 4 「ビューファインダー」の室内 (<http://www.gooood.hk/viewing-pavilion-on-hill-tao.html>) (写真14)



日暮里富士見坂における富士山の借景 (2013年) (写真10)



蘇州の古地図 (張英霖『蘇州古城地圖』より) (図4)

ある(写真12)。中国においても、建築家華黎の作品である丘にある小型景観建築は、文字通り「ビューファインダー」と名付けられた。建築の形態もその名前に応じ、借景の画框となっている(写真13・写真14)。

中国と日本との違い、また、眺望と框景との違いなどはあるにもかかわらず、園林(庭園)、都市および建築において、「借景」は視覚的な景観でありながら、人が感じられる、自然との繋がりを作り出すことを実現する道具でもあるといえる。つまり、小沢圭次郎がいう「天工人為」の「湊合」である。

市においても、「富士見」のような非常に鮮明な借景の例が見られる。富士山への眺望を対象とする、関東地方から中部地方に及んだ数百kmにわたる地域に、「富士見」と名づけた眺望の良いスポットが遍在し、東京都内においても十数余りの場所が数えられる。「日暮里富士見坂」は、残念ながら近年ついにその眺望が失われてしまったが、富士山を「借景」とする都市景観であったと解釈することも可能である(写真10)。

町全体としての借景に対して、逆に単体の建築のような小さいスケールの場合においては、框景がより大きい可能性を示していると考えられる。これは蘇州園林と同じく、特に上記の「網師園」のように、建築が景框となる。日本の例ではたとえば安藤忠雄の名作「水の教会」は、まさにこのような建築である。教会の室内空間が水面と遠景を見る道具を提供し、人工景観と自然景観が融合する静謐な雰囲気を作り出している(写真11)。また、西沢立衛の「豊島美術館」は、美術館そのものが自然要素と変化を感知する容器となっており、建築の内側では、余計なものがすべて除去されている。残されたのは、風と水と、二つの大きな開口部から見える木漏れ日だけで

参考文献

- 明代計成著、陳植注、園冶注釋、中国建筑工業出版社、1988
- 小沢圭次郎、園苑源流考、国華、1890-1905
- 周宏俊、借景の展開と構成：日中造園における比較研究、東京大学博士論文、2012
- 本中眞、借景 日本の美術372、至文堂 1997

# パリの景観観察ノート

文・写真 松村公明

ミシュランの観光案内書の地図には㉞の記号が描かれている。  
これはpoint de vue 眺望点を表している。まずは眺望点を手がかりにパリの都市景観を観察してみよう。



写真1 イタリー広場の眺望点からパンテオンを望む(2010年)

ゴブラン通りが写真奥へ向かって下り勾配であるためか、サント=ジュヌヴィエーヴの丘の高まりがここからは明瞭である。(2010年11月筆者撮影)



図1 イタリー広場と眺望点

イタリー広場からゴブラン通りが発する地点に眺望点point de vueの地図記号が付されている。「ゴブラン地区」の地図に示された順路は、イタリー広場に面したパリ13区役所前を出発点として、カイユの丘を経由、ピエール川の暗渠上をたどり、ゴブラン織製作所前を到着点とする2.5km、所要2時間である。

実業之日本社編(1991)より転載

をテキストとして、パリの都市景観を紹介しながらその一端を探ってみることにしよう。  
立ち止まって眺める

イタリー広場 (Place d'Italie)  
かつてのパリの入市税徴収所の一つであったところだが、今は背後に高層住宅ビルが林立する地域が広がっている。ゴブラン通り Avenue des Gobelins にやさしかかるところからは、パンテオンがよく見える。ポビヨ通り Rue Bobillotとイタリヤ大通り Avenue d'Italieとの角には日本の建築家丹下健三の

設計になる「第7芸術センター」の建造が進行中である。このオーディオヴィジュアルの総合施設にはフランス最大のスクリーンが設置される予定である。「パリ ミシュラン・グリーンガイド」1991年

1995年、初めてのフランス渡航に際して購入した観光案内書「パリ・ミシュラン・グリーンガイド」は、「Guide Vert Paris」(キム・ヴェール、パリ)の日本語翻訳版として実業之日本社から1991年に刊行された初版であった。もはや古典の域に達しているとは言

「景観」と聞いて今でも最初に思い浮かべるのは、ステレオタイプではあるものの、富山県砺波平野の散居村であったり、フランス・ノルマンディ地方のボカージュ Bocage 景観であったりする。これらの文化景観は、伝統的な地理学の教科書や地誌書の中で、大抵の場合には高所からの俯瞰写真とともに繰り返し紹介されてきた。ジブリのアニメ映画「おもひでぽろぽろ」では、田舎の景色について、「人間が自然と闘ったり、自然からいろいろなものをもらったりして暮らしているうちにうまくいってきあがってきた景色」と、トシオがタエ子に語るシーンがある。田舎の景色が「自然と人間との共同作業」によって、長い年月を重ねて生成されてきたものとする、タエ子が暮らす都会の景色は、短期間に多くの人間が作業に加わってしまった結果、と言えるのかも知れない。たとえば、フランス語の「景観」 Paysage が農村に関連する言葉から生まれたのに対して、都市景観 Passage Urbain の語がフランスの辞書に初めて搭載されたのは1965年頃であるという(ピット、1985...荒文、2011)。

そこで、最初にミシュランの観光案内書ギド・ヴェール Le Guide Vert (グリーンガイド)はパリ行きの旅行鞆に必須の品となっている。本書ではおなじみの、星の数で評価された見どころを中心に、パリ市内で40余りのエリアを選定、エリアごとに掲載された独自の地図には、それぞれの街区をあたかも博物館に見立てたかのような順路が明示されている。読者は順路に沿って歩を進めることにより、「見えてくる順」に記述された詳細な解説文に目を通す仕組みである。この点では、フランス人が一般的にマニュアル的な観光ガイドブックを忌避し、言わば行き当たりばったりの「遊歩」に旅の愉しみを見出すとしても、本書はかなり学究的な解説文と精緻な地図によって、数ある観光案内書において示すべき手本であり続けてきた。

そのような中でいつそう興味深いことは、エリア別の地図中に、地図記号としてしばしば㉞の記号が描かれていることである。この扇に似た地図記号㉞は、凡例によると point de vue 眺望点を表しており、扇の向きは眺望方向を指し示している。フランス国土地理院(IGN)発行の2万5千分の1地形図にも同



写真2 パンテオンのドームからラ・シャペル隘路を見渡す(2016年)

写真中央、ノートルダム大聖堂の背景として、左手奥にモンマルトルの丘、右手奥にショーモンの丘、丘と丘の間の鞍部がラ・シャペル隘路である。ノートルダム大聖堂の塔の奥にポンピドゥーセンター(1977年開館)が隠れている。(2016年10月筆者撮影)



義の地図記号が記されていることから、「立ち止まって景色を眺める」または「高所から眺望する」という行為が、地図を片手に歩く人びとにとって景観観察の基本であることを改めて思い出させてくれる。

実際にイタリー広場に付された point de vue に立ち、ゴブラン通り(Avenue des Gobelins)に視線を向けると、解説文のとおりセーヌ川左岸のカルチエ・ラタンを象徴するパンテオン(Panthéon)が正面に望まれる(図1・写真1)。さらにパリを歩き回った結果、この場所がパンテオンを頂くサント＝ジュヌヴィエーヴの丘(La Montagne Sainte-Genève)の高まりを明瞭に認識できる地点で



写真4 モンマルトルの丘からラ・シャペル隘路を俯瞰する(2015年)

写真中央の大屋根がフランス国鉄の北駅。北駅の奥にはショーモンの丘の高まりを望む。ショーモンの丘は、ベルヴィルの丘、メニルモンタンの丘へと、パリの東側を縁取る一連の丘陵部の一端を成している。(2015年9月筆者撮影)



写真3 パリの立体地図模型

パリ市はたまご型をしており、たまごの右側(東)から左下(南西)に向かってセーヌ川が流れている。セーヌ川の手前(南)が左岸、奥(北)が右岸である。たまごを2つに割るように左岸から右岸へ向けてセーヌ川に直交する直線がパリの基軸(南北軸)であり、南北軸がセーヌ川を渡る地点にシテ島がある。シテ島の手前(左岸)の小さな高まりがサント＝ジュヌヴィエーヴの丘であり、その頂にパンテオンがある。南北軸が右岸に達して奥へ進んで行くと左右2つの高まりの谷間を通過する。この谷間がラ・シャペル隘路である。ラ・シャペル隘路から見て左側(西側)の高まりはモンマルトルの丘、右側(東側)の高まりがショーモンの丘である。

(「Paris et Petite Couronne」 Carte GéoRelief par Reliefs Editions)

あることに気がつく。同時に Avenue を冠した街路が、辞書の定義どおり「並木のある大



写真5 パンテオンのドームからイタリー広場を眺望する(2011年)

写真中央の高層ビルの手前がイタリー広場、そこから並木のあるゴブラン通りが手前へと向かってくる。シワジーの三角形は写真左手奥に位置する。  
(2011年11月筆者撮影)

通り」であることに加えて、並木が街路沿線のフアサードを概ね覆い隠し、パンテオンを強調する効果を発揮していることがわかる。このことはシャンゼリゼの並木が、エトワールの凱旋門を際立たせていることに似ているであろう。これは決して近年の日本で乱発気味の「絶景」ではなく、パリの都市景観の一面に過ぎないが、パリの一般性と特殊性を理解するための一助となることは確かである。ゴブラン通りは19世紀半ば、当時のセーヌ県知事オスマンによる「パリ大改造」によって新たに造成された大通りであった。オスマンによって新たに整備された大通りは広場と広場を直線的に連結し、広場に建立された記念柱などのモノユメントが、通りを進む馬車にとってパリの威厳をも示すランドマークとなっていた。自然環境の一部であるサント＝ジュヌヴィエーヴの丘とオスマンの意図が協調した結果、ゴブラン通りが方向づけられたことになる。

### 高所から俯瞰する

パリの景観という局面からみたパンテオンの重要性は、サント＝ジュヌヴィエーヴの丘の頂点に位置するその立地場所もさることな

がら、パリの起源と成長に関わる基軸(パリ南北軸)上を占めるその関係位置、すなわち地理的位置にある。このことは、パンテオンのドームからパリ南北軸を俯瞰的に見渡すことによって明らかになる。パリ南北軸とは、観光の主軸となるパリ歴史軸と比べて知名度は低いものの、中世まではパリの基軸として地図の骨格となっていた。現在のパリにおける南北軸は、サント＝ジュヌヴィエーヴの丘を越えてセーヌ河岸へまっすぐ下るサンジャック通り、さらにシテ島を渡河点としてセーヌ左岸からセーヌ右岸へ渡ると、サンマルタン通りと名を変えて北上する一筋の街路に概ね比定されている。

パンテオンのドーム展望台から基軸に沿いに北の方向を見渡すと、ノートルダム大聖堂の南側側面を正面に捉えることができる(写真2)。ここからは、大聖堂を取り囲むセーヌ川の水面こそ望めないものの、渡河点としてのパリの起源と立地を思い起こすことができれば、大聖堂が位置するシテ島とセーヌの流れを想像できるであろう。しかしながら、この景観観察の目的は、ノートルダム大聖堂を近景に、その背後の緩やかな鞍部を遠景とする、言わば借景としての空間を景観として

捉えることにある。写真2の奥に目を転じると、左手にモンマルトルの丘、右手にはやがてベルヴィルの丘へと続くシヨームの丘の緩やかな斜面が見て取れる。シテ島を渡河点としてセーヌ川を渡った古代のローマ軍道は、写真3にも示されるとおり、モンマルトルの丘とシヨームの丘の間のなだらかな谷間、ラ・シャペル隘路を通過することによって、南北にパリを縦貫していたとされる(アラノール, 2005)。

ラ・シャペル隘路は、現在でもパリから北へ東へと向かう幹線交通を束ねる大動脈となっている。たとえば、パリと北フランス・方面とを結ぶ鉄道路線は、北駅(Église)をターミナル駅としてラ・シャペル隘路を通過する(写真4)。パリからロンドンへ向かう高速列車ユーロスター、パリからブリュッセルへ向かう高速列車タリスは北駅を出発すると、左手にモンマルトルの丘に立つサクレクルの大聖堂を仰ぎながらパリ北郊へと加速してゆく。同様に、パリの北東に位置するシャルル・ド・ゴール空港からパリ市内を結ぶロワシバスも、通常の場合には、ラ・シャペル隘路が現在のパリ市境と交わるラ・シャペル門(Porte de la Chapelle)を経由す

る。地形的な制約は現在に至ってもパリの都市構造に影響を与え続けており、ラ・シャペル隘路の轍はますます深まっているのである。このように、パンテオンのドームを視点場としてノートルダム大聖堂を眺望することは、ルテチアとしてガリア戦記にも描かれたパリの原型と、そこから2000年の時を経て成長した現代のパリを同時に俯瞰する意味で、パリらしさを備えた見るべき景観の一例として特筆できる。ベルク(1996)による借景の構造に示された表現を借りると、この景観は、近景となるノートルダム大聖堂「maison-jardin」に、遠景のラ・シャペル隘路「grande nature」を取り込むことによって構成されるが、中景となる公共空間、すなわち都市空間「espace public: la ville」の挙動に景観変化の鍵が預けられていることは言うまでもない。

### もう一つの見るべき景観

一方、パンテオンのドーム展望台を南東側に周囲すると景観は一変する。写真5の中央には写真1の視点場であったイタリー広場と、そこから手前に向かってくるゴブラン通りを望む。イタリー広場の右手には、ミシユラン



写真6・7・8・9 ショワジーの三角形を中心とするパリ13区のインドシナ華人街（2015年～2017年）

遠目では無機質に感じられる都市景観も、“摩天楼”の下にはアジアの人のびとを中心とした豊かで活力のある生活空間が広がっている。パリ市民にとって隣接するカイユの丘とともに再び新しく魅力的な街区として見直され、ギド・ヴェールは最近、アジアの食文化に触れることのできる観光エリアとして、ページを割いて紹介し始めた。

（写真6と7は2016年10月、写真8は2015年9月、写真9は2017年11月筆者撮影）

参考文献

荒又美陽(2011):『パリ神話と都市景観—マレ保全地区における浄化と排除の論理』明石書店。  
 オーギュスタン・ベルク著、宮原 信・荒木 亨訳(1996):『都市の日本—所作から共同体へ』筑摩書房。  
 大塚直樹(2017):『都市のフィールドワーク—身近な他者を発見する—』高山陽子編著『多文化時代の観光学 フィールドワークからのアプローチ』ミネルヴァ書房所収。  
 グザヴィエ・ド・ブラノール著、手塚 章・三木一彦訳(2005):『フランス文化の歴史地理学』二宮書店。  
 実業之日本社編(1991):『パリ ミシュラン・グリーンガイド』実業之日本社(著作:フランス ミシュランタイヤ社、日本語版編集・発行:実業之日本社)。  
 ジャン＝ロベール・ピット著、高橋伸夫・手塚 章訳(1998):『フランス文化と風景』東洋書林。  
 ミシェル・パンソン、モニク・パンソン＝シャルロ著、野田四郎監訳(2006):『パリの万華鏡 多彩な街の履歴書』原書房。  
 宮崎 駿プロデュース、高畑 勲脚本・監督(1991):『おもひでぽろぽろ』スタジオジブリ。

に「日本の建築家丹下健三の設計になる第7芸術センター」と記されていたグラン・エラン Grand Eran が、今やイタリー広場のランドマークとして完成している。しかしながら、何よりも目を惹きつけるのは、ミシュランの記述にあるとおり、イタリー広場の背後に林立する高層住宅ビル群、いわば「摩天楼」gratte-cielのスカイラインであろう。パリらしさを屋根の上に求めて世界中からやって来た訪問者は、この「摩天楼」の景観については、見えても見ていないことにすると決め、一方、パリ市民の間では、数々の失敗作の中でも破局的であるとして、しばしば困惑的となった。

イタリー広場の奥に広がる「摩天楼」は、1960年代以降の一連の再開発プロジェクトによってもたらされた。再開発プロジェクトの中には、レゾランピアド「Les Olympiades」とマセナ Masena の都市開発プロジェクトがある。これらのプロジェクトは、低家賃住宅から公務員住宅を含む多様な階層向けの集合住宅、教育施設、商業・スポーツ施設の複合開発によって、「対照的な社会集団の間で調和のとれた交流を生み出し、共生を促す」(パンソン・パンソン＝シャルロ、2

006)ことを目的とするものであった。この意味では、居住機能に特化した日本の住宅団地とは異なり、1860年までは入市税徴収所の外側、つまりパリの外側であったこの地に、複合的な機能を備えたカルチエのような空間を創り出そうとする試みであった。しかし、結果的には期待された効果を発揮しないうまま、おもに1970年代以降、ベトナム戦争やラオス内戦をはじめとするインドシナ戦争にもなう避難民の受け入れ、とりわけインドシナ華僑の流入と定着が進行し、今や欧州最大とも言われるチャイナタウン (le quartier asiatique)、あるいはインドシナ華人街が形成されている。いわゆるショワジーの三角形 Triangle de Chivry を核心としたエスニックタウンである。日本の「中華街」をはじめ、欧米都市の都心に近接したチャイナタウンの景観とは異なり、高層住宅団地群に形成されたその特徴から、パリ市13区に位置するにもかかわらず、パリ郊外のチャイナタウンと呼ばれてきた(写真6・7・8・9)。しかしここで重要なことは、パリもまた世界の大都市と同じく、転出にもなう深刻な人口減少を食い止めるため、市域外縁部を対象にブルドーザー型都市開発を推し進めた時代の残影

が、この高層住宅団地群の景観であることと知る。このため、私たちはこの景観を1960年代～70年代にかけて生成された、見るべきパリの都市景観として記憶にとどめ、同時に、「パリらしい都市景観」は、パリ市外縁部から既に市境を超えて膨張する郊外化と引き替えに成り立っていることを、この景観の一断面を通して想像する必要がある。

初めて訪れる場所の経験は目に映るすべてが新鮮で、子どものような好奇心に溢れるものである。初めてベトナム・メコンデルタを訪れたA先生によって撮影された1枚の写真。A先生は確かにアオサイの制服姿で橋を渡つてゆく女子生徒を撮影したつもりだったが、この1枚の写真を手がかりに、大塚(2017)は、同じ景観を観察したとしても、何をみているかその対象が異なることを示し、景観の背景にある歴史的・文化的情報を事前に入手することの重要性について述べている。景観は場所の一般性と特殊性を現地で丁寧に教えてくれるが、そのためには、たゆまぬ旅の経験と知識の蓄積がいつそう欠かせないように思われるのである。

2018年3月に立教大学観光学部を定年退職される村上和夫先生に感謝して、このささやかなレポートを献呈いたします。

# 「体験交流型観光」に取り組む現場から学ぶ

豊田三佳研究室（観光学部交流文化学科）

豊田研究室では、2年ゼミ合宿で徳島県「にし阿波、剣山・吉野川観光圏」にフィールド調査に出かけている。ここ10年間で外国人観光客が大幅に急増した特徴ある山岳地域の集落を訪ねた学生たちの活動を報告する。



高地集落にて地元のお母さんの手作りおやつをいただきながらお話を伺う。

## 2

015年以来毎年夏休みの2年ゼミ合宿で徳島県「にし阿波、剣山・吉野川観光圏」に

フィールド調査に出かけている。著者の専門は社会学で、国境を越えた人の移動を通して創出されるコミュニティ・ネットワーク・組織が研究対象である。具体的に観光の現場においては、1) 観光客とホスト社会の関係、2) 地域住民・地方自治体・観光産業の連携関係、3) 訪日外国人とのコンタクトゾーンなどに着目している。豊田ゼミでは夏のゼミ合宿のフィールドワークを中心に据え、春学期には事前準備として学生はそれぞれの興味・関心に基づいてテーマを設定し、グループに分かれて現地でのインタビュー調査実習に備える。そして秋学期には夏のフィールド調査後のまとめとして、現地調査で得たフィールドデータの整理・分析、レポート集の作成に取り組む。

フィールドワークは現地集合・現地解散の3泊4日の行程で、最終日にはフィールドワークで学んだこと・考えたことに基づいてグループごとの発表・提案を行う。自治体、地域の地域の人々が聴衆として聴きに來るため、調査地でお世話になった地元の人々への

成果の還元の間でもある。最終日の発表という一つの目標が設定されているため、学生たちは毎晩フィールド・ノートを整理し議論を重ね、特に最終日の前夜は明け方近くまで、発表準備に取り組んでいる。

最終日の発表を聞いているとフィールドワークを通して、学生たちが着実に成長したことを実感する。2年ゼミで行う初めてのフィールドワーク体験は、その後のゼミ活動においても一つの重要な起点になっているように感じている。

フィールドワークでの体験・気づきが自身の知的好奇心を刺激し、興味・関心のあるテーマをみつけて、それを掘り下げるきっかけになることが、豊田ゼミの活動の中でフィールドワークを行う意義だと考えている。

フィールド調査地のにし阿波・祖谷地域の観光資源を具体的に取り上げながら、ゼミの学生たちが取り組んできた調査内容について述べたいと思う。

### にし阿波・祖谷地域の「体験・交流型観光」

徳島県のにし阿波・祖谷は、四国山地の最高峰である剣山（1955m）の西側に広がる山岳地域で、奥深い山々の急斜面にへばり

つくように高地傾斜地集落が数多く点在している。宮城県の椎葉村、岐阜県の白川郷と共に日本の三大秘境にも数えられている地域で、妖怪伝説など独特の文化・歴史がある。著者は以前、中国雲南省・ミャンマー・タイ北部を移動する「山の民」の研究をしていたことがあるが、祖谷の山里の集落はまさに日本における急峻な山岳地帯の暮らしが伺える地域である。その昔から「そら」と呼ばれてきた高地に暮らす人々の生活の知恵と技術の結晶は、農耕システムにある。場所によっては傾斜40度にもなる急傾斜地は、地面に対して垂直に立つことさえも難しいが、そこに先人たちは手間をかけて石垣を作り、土の本来の力を生かして、農業を営んできた。土壌の流出を防ぐために、茅を束ねて円錐型の「コエグロ」を作り、コエグロで天日干しにしたカヤを畑に敷き込んで肥料にするという農法が受け継がれている。にし阿波地域の「傾斜地農耕システム」は、土地に負担をかけず、土を育てる自然循環型の有機農法として「食と農の景勝地」に認定された。さらに、2017年3月には、「世界農業遺産」の内候補地に認定されている。傾斜地で育てられたそばを使ったそば米雑炊や祖谷そばはこ

の地域の郷土料理である。地元の岩どうふと言われる山の豆腐は縄で縛って持ち運びができるほどかみこたえのある豆腐で、それと地元産の玉こんにやくや急斜面農法で栽培された小型のコロコロのじゃがいもを串にさして味噌田楽にした地元の郷土料理「こまわし」も学生に人気が高い。ゼミ合宿に参加した学生たちは、自ら鎌を片手にカヤを刈り、地域の住民たちから「コエグロ」作りを学ぶというフィールドワークを通して「体験・交流型」観光を体感する。この地域では近年、農作業や山の生活を体験する「体験型教育旅行」の受け入れ農家民泊受け入れ家庭数が拡大しており、受け入れ泊数は977人（2008年）からには3827人（2016年）へと急速に増加している。

ゼミ学生の調査テーマの一つは、観光客の受け入れが地域住民に与える影響である。そのため、農家民泊を受け入れている地元の方々にインタビューをして、お話を伺った。自分の自宅に訪問者を受け入れることへの抵抗感や問題点、また外国人の観光客の場合にはコミュニケーションの難しさや対応方法などが主な質問内容であった。体験型教育旅行の受け入れ校数は、10年ほど前は4校であっ



2



1 棒を中心に据えてコエクロ作り



3

2 鎌を片手にかやを刈るセミ生たち  
3 地元のお父さんの説明を聞き入る

ものと考えられているため、なぜこの地域では、尾根に近い山の高地斜面に集落が形成さ

れたのか不思議に思う訪問者は多い。この地域の地質は断層破砕帯であるため、高品質な

湧き水が豊富で、高地でも生活用水を確保することが可能であった。彫刻のようにそそり

た(2008)が、2015年には25校になった。それに伴い農家民泊受け入れ家庭数も70軒から156軒へと増加している。過疎・高齢化が深刻なこの地域において、都会から訪れる中・校生の受け入れ交流の機会を、地域住民の人々自身が楽しんでおり、まるで、親戚の子供達を迎え入れるような自然体で受け入れている様子を、学生たちは驚き、予測し

ていたよりもずっとポジティブに地域に作用していることがわかった。農家民泊をされている家庭は、最初は不安や戸惑いがあるようだが、年に2回民泊研修会も開かれており、農家民泊をしている他の家庭から教わる機会や相談する場が提供されていることも農家民泊受け入れ家庭数の拡大に寄与していることもわかった。お客様扱いした「お接待」をす

古民家の再生事業  
深い森に囲まれた山あいには江戸時代中期から昭和初期に建てられた民家がある。中には築300余年と推定される見事な床板の民家も残されていて、国の重要伝統的建造物保存地区に選定されている集落もある。一般的には、集落とは平地の川沿いに形成される



上 急斜面農業：白い可憐なそばの花がそよぐ 下 地元のお祭りの準備：しめ縄作りの手ほどきを受ける

るのではなく、家族の一員として受け入れて、日常の暮らしをいつものやり方で、空間と時間を一緒に共有するという姿勢がむしろホスピタリティの真髄で、訪問者のみならず、ホスト社会にとっても価値ある交流体験となることかみえてきた。受け入れた子供達が、打ち解けて親しくなった後、別れる時が寂しいという感想や、帰宅後も手紙を書いてくれたりして交流が続くのが嬉しいと、几帳面に全ての手紙を整理して保管しているファイルを見せてくれた受け入れ家庭もあった。素朴で親密な交流体験を中心に据えた観光において、観光客とホスト社会の関係は一過性ではなく、持続可能な関係性を生み出す可能性を秘めており、それを継続・促進するような仕組み作りも必要だと学生は最終日の提案発表の中で述べていた。



1



1 古民家にてヒアリング 2 外国人旅行者へのインタビュー調査



3

3 「案校の宿あるせ」にてヒアリング

伝統工法に基づいて改修された昔ながらの質素な茅葺き民家であるが、内部設備は床暖房

完備で、キッチン・バス・トイレに最新の設備と快適性が整えられている。内装も素材感

や造形・照明などにこだわった仕上げで独特な上質空間を生み出している。一棟貸切型の

立つ美しい渓谷を流れる翡翠色の吉野川の清流は、ラフティングのメッカとして知られており日本で初めてのラフティングの世界選手権が行われた。しかしその一方で、吉野川は

日本三大暴れ川の一つでもあり、「四国三郎」の異名を持つほど数多くの水害をもたらした歴史があり、江戸時代の200年間に100回ほどの洪水に見舞われたという記録が残さ

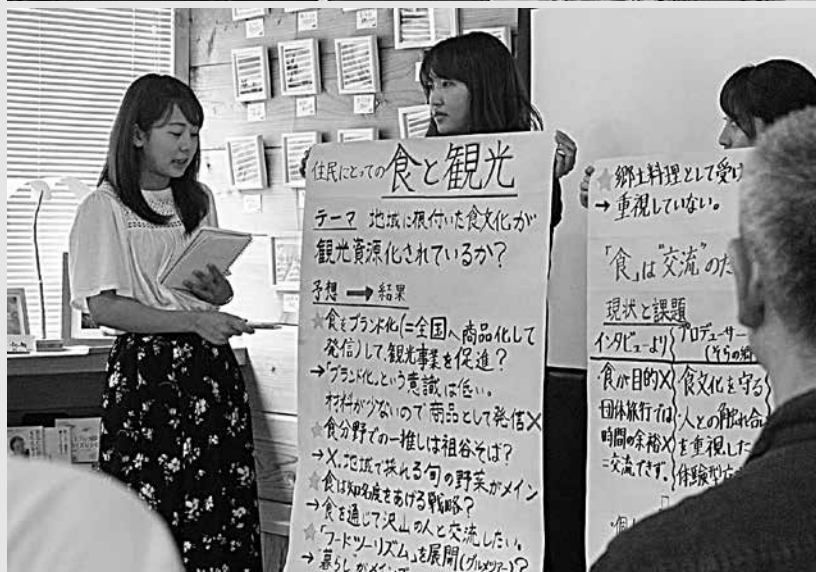
業で改修された落合集落に点在する8棟の茅葺き民家の施設をアレックス・カーが取締役を務めている「ちいおりアライアンストラスト」が運営管理している。外装はこの地域の



上 郷土料理の「てこまわし」 下 農家民泊の経験を伺う

れているそうである。ダムが建設され下流域の洪水被害が軽減される以前、湧き水が豊富なこの地域における山の尾根は、人々が移動するための重要な交通経路の役割を果たしてきたため、山の高地斜面に集落が形成されたと言われている。

東洋文化研究家のアレックス・カーは、この地域の山里の景観に魅了され、「悠久の時を閉じ込めた『桃源郷』のようだ。」と表現しており、空き家となった古民家を茅葺き民家型の宿泊施設として再生させる「桃源郷祖谷の山里」プロジェクトに携わった。三好市の公共事



上 夜明けまで議論しながら発表準備に取り組むゼミ生 下 最終日には地元の人々に前に成果発表会

宿泊スタイルは、これまでの民泊やホテル・旅館とは異なる「隠れ家」型の新しい宿泊スタイルを提供している。ゼミ合宿では、このような宿泊施設に滞在あるいは宿泊して、古

民家宿泊施設の運営に携わっているスタッフからヒアリングを行い、利用客への情報発信の方法や運営管理上の課題について学んだ。2005年にはNPO法人としてスタート

いおりアライアンスは事業の目的として、「祖谷をはじめとして、こうした山村集落における生活習慣や人々のつながりに新たな価値を与え、多くの人々と共有し、その結果として

私たちを惹きつける美しい景観や伝統的な生活様式を持続可能なものとして残していくこと」を掲げている。そのため、宿泊事業のみならず、古民家を拠点として地域の方々と訪問者との交流が図れるようなイベント、ワークショップなども開催していることを伺った。お洒落な隠れ家型の古民家に滞在する観光客数が増加するだけでは不十分で、そこからどのように交流・移住人口の拡大につなげていくかが地域の持続可能な観光のための重要課題であることを学生は最終日の発表で取り上げていた。2年ゼミの合宿をきっかけに、地方への移住という課題に関心を持ち始め、4年生の卒業プロジェクトでは「ターン・Uターン」地域おこし協力隊など地方自治体の移住政策をテーマに選んで取り組む学生も少なくない。

### インバウンドと交流人口の増加

徳島県三好市の総人口は7万1320人（1960）から2万6851人（2015）に減少している。徳島県と高知県の県境にある山深い地域に位置する「有瀬」小学校は、かつて100人以上の小学生が学んでいたが、人口減少の波の中で廃校になってしまった。

若者や子供たちが集落からいなくなつて、「なんとかせないかん。このままでは集落が消滅してしまう。」という共通の切迫した思いから、廃校となつた学校を改修し、「薬校の宿あるせ」という宿泊施設として蘇らせた。「薬校の宿あるせ」の運営主体は、地元に住む地域住民でこの小学校の卒業生たちである。どのように地域住民が連携して運営に取り組んでいるのか。訪問者にどのようなプログラムを企画しているのかなどについてゼミの学生たちは、運営スタッフにインタビューを行った。宿泊施設ができることにより、都会に移住した人々も家族連れで故郷を訪ねることが可能になったことは地域住民のつながりを實質的に保持できるという意味で意義深いことがわかった。また、この地域は雲海が頻繁に見られる高地で山茶の産地で、「天空の山茶」として知られているが、校庭にピザを焼く手作りの釜を完成させ、月に一回くらいのペースで「山茶カフェ」というイベントを開催し、交流の空間を提供している。

にし阿波地域への外国人宿泊数は、ここ10年間で952人（2007）から2万3681人（2016）へと大幅に急増している。「自然と共存する集落で暮らしを

体感でき、地元住民に触れ合う旅」は、海外からの観光客からも注目されている。地域住民の「地域への思い」から生まれる親密で素朴なもてなしは、心の温まる交流の旅を作り出す。『National Geographic』からの読者ツアーも定着してきており、近年は定期的に開催されている。ラフティングの国際大会が開催された際、英国からのチームは「薬校の宿あるせ」を宿泊施設として利用した。学生たちは地元の住民たちがいかにして外国人観光客とコミュニケーションをとるのか、問題はないのか心配していた。しかし、地元住民は英語が流暢に話せるわけではないけれど、携帯電話に翻訳アプリをいれて、それを片手にコミュニケーションをはかっており、親密な交流が成り立っていることに学生たちは衝撃を受けていた。ある学生のゼミ合宿の感想を最後に締めくくりたいと思う。

「祖谷で過ごした4日間は自分のなかで人生の転機ともいえるほど大きなものとなりました。首都圏で働いて暮らすことしか頭になかった私を立ち止まらせ、今の社会のあり方についても深く考え直させてくれるきっかけになりました。」

（豊田三佳）

したちいおりトラストは、2015年以降は株式会社となり30代の若者がこの地域に移住してきて働く場を提供している。とはいえ、地元集落の人々のお手伝い（アルバイト）と協力なしでは成り立たない。なぜなら宿泊客の滞在中の食事は集落の畑で収穫した季節のもので地元のお母さんが郷土料理を作っており、チエツクアウト後の清掃も地域住民に依頼しているからである。しかし、地域住民は高齢化しており、人口減少は著しい。現場ではスタッフの人手不足という深刻な課題に直面していることを学んだ。ち

## 読書案内

今回は本号の特集テーマの補助線ともなる2冊。



## フンボルトの冒険

## 自然という〈生命の網〉の発明

アンドレア・ウルフ 著（鍛原多恵子訳）（二〇一七）  
NHK出版（本体二九〇〇円＋税）

## 出来事と写真

島山直哉  
大竹昭子

## 出来事と写真

島山直哉・大竹昭子 著（二〇一六）  
赤々舎（二〇〇〇円＋税）

## ま

ず紹介するのは、近代地理学の祖とされるドイツの学者フンボルトの伝記。原題は『The Invention of Nature: The Adventures of Alexander von Humboldt, the Lost Hero of Science』とある。ロスト・ヒーロー。著者によればフンボルトはなんと「英語圏ではほぼ忘れ去られている」という。その理由の一つは第一次世界大戦以降の

英米における反ドイツ感情にあるというが、もう一つの理由が本書の中心テーマである。

それは書名にもある通り、「自然」をさまざまなものが繋がった全体の系として捉えるものの見方、これがフンボルトによりもたらされ、それが浸透するに従い我々はその起源を忘れてしまったからなのだという。なるほど柄谷行人も「風景とは一つの認識の布置であり、いった

たのか疑わしいところもあるが、ともかく近代科学はフンボルトの志向とは逆に進んでいった、というかこれに抗ったのがフンボルトであった。こうしたフンボルトの視線は、今という自然環境にのみ注がれていたわけではなかった。南米を5年以上も旅行できたのはスペインの支援を受けながら当時のスペイン領を訪ねたからであったが、そのことは植民地化による奴隷問題や環境への負の影響を考えさせる契機にもなり、それが環境を全体として捉える視点にも繋がっていることを本書は教える。

本書はダーウィンを始めフンボルトに強く影響を受けた人物も紹介するが、そこには登場しないものの、フンボルトの没後間もなく生まれた日本の植物学者三好学もその一人である。そして科学者と芸術家の立場をあわせて自然を相貌的に捉える概念として三好が創案した言葉が、「景観」である（特集参照）。

なお本書はフンボルトの南米やロシアへの旅行記にもなっているが、今時はGoogle Street Viewなどを活用しながら読むのも一興である。200年前の超人フンボルトの大旅行に、現代技術の助けを得ながらわずかでも近づけることが可能かもしれない。

次に紹介するのは、写真家の島山直哉氏と写真・文筆家の大竹昭子氏の一連の対談をまとめ

たものである。写真家とは一般には「芸術」としての写真を扱う表現者ということになるだろうか。少なくとも本書ではそれを一つの前提としている。島山氏は大学で写真を学んだ「正統」な写真家であるが、そこで教えられた写真とは、そこに写っている内容や出来事とは関わりなく、純に写真としての作品性が問われるものだったという。タイトルやキャプションもつけない言葉に頼ることのないただの写真がすべてであると。芸術というものの独立性に価値が置かれてきた、ここしばらくの流れの一例であるということもできる。

それが大きく揺さぶられることになったのが、東日本大震災である。陸前高田出身の島山氏は「見渡す限りの瓦礫の中で、自分や家族や知り合いのことを思うとき、そしてそれが写真にももう写せないと覚悟をするとき、『いい写真』は空疎な響きしか持たない言葉のように思えてくる」体験をし、『私』をテーマにしたくはないにもかかわらず、出来事が生じたときにそこに巻き込まれる決断」をしたという。この過程を大竹氏が対話によって引き出していく。

ただ島山氏はそれ以前から、写真における形式と内容の分離には違和感を覚えていたようだ。たとえばある人物モデルを撮影した写真その人物とは切り離して「写真として」論するの

んそれができあがるやいなや、その起源も隠蔽されてしまう（特集参照）と述べている。

確かにフンボルトの名は知られているが、何かを発見したというようないわゆる大科学者のイメージは希薄である。しかし本書では、これ以上のフィールドワーカーを想像しがたいほどの超人ぶりで文字通り「地球を歩いた」フンボルトが、自然を今という生態系として認識していく過程を辿ることができる。地理学という範疇では済まない、世界の認識の布置の大いなる転換者がフンボルトであった。

ただし、日本を含む東洋思想からみればこの認識は古くからなじみあるものかもしれない。しかし本書が同時に教えてくれるのは、日本も巻き込まれていく19世紀以降の世界標準となる科学の方向性の問題である。フンボルトは測定器を携えた科学者でありながら、同時に画家や詩人のように自然を捉えることにこだわった。しかし時代は科学と芸術を分け、さらに科学を細分化していく。そうするとフンボルトがもたらした認識の布置は後の社会に本当に浸透し

がモダンな芸術としての写真論であるが、その写真を見て「きれいな人ですね」と感じることを、それを伝えることも写真の立派な役割であると。

これはフンボルトから200年を経て、科学や社会から分離されてきた芸術に対する芸術側からの問いかけとして読むこともできるであろう。もちろんこれまでこうした動きがなかったわけではなかったが、特に島山氏のいう「具体性から逃れられない」という性質を持つ写真は、フンボルトが自然を絵画のように捉えようとした科学の方法にもなじみやすいと思われ、当時写真技術が実用化されていたならばフンボルトがどのように活用したか想像してみたい。実際、三好学は自然の景観の写真集を出している（特集参照）。

大竹氏はいう。「人間の歴史が進めば進むほど、物事は複雑になり、それぞれの分野に専門家が生まれ、細い鉛筆のようなピルのなかで隣の管轄には手を出さずに専門に動かしむようになります。（中略）写真家とはそのような鉛筆のピルの密林に踏み込んでいき、互いを隔てる壁を壊し、見晴らしをよくする人のことだと思えます。」写真だけでなく、フンボルト以降の歴史における科学・芸術等の状況に加えて、「景観」という概念の意義についての説明にもそのまま適用可能な至言に思われる。（小野良平）



# Netherlands

## ヴァーヘニンゲン 大学とゲストハウス での日常生活

韓志昊



2015年秋から長期海外研究のためにオランダのヴァーヘニンゲン大学に赴いた韓志昊教授によるレポートは、現地で滞在した大学とゲストハウスでの生活の思い出を綴る。写真は、ガラス張りで作られた中庭のある研究棟。

### 最初のヨーロッパ訪問の思い出は暗い冬

初めて訪れたヨーロッパの国は、大学の卒業旅行で行ったドイツだった。ドイツで滞在していた従兄弟の家族が住んでいたデュッセルドルフという町で3週間を過ごす予定で、クリスマス前後はパリに行くことを楽しみに渡航した。しかし、到着した次の日になって、朝は9時過ぎにうっすら明るくなり、午後3時ぐらいには真っ暗になるドイツの冬の気候のことが知った。それから10日後、お日さまを見ない日が続くことに耐えられず、パリの

クリスマスを諦め、帰国した。未だに家族に笑われる事件だった。

その時の辛い記憶が理由ではないが、その後、観光の研究者になってからも、ヨーロッパのどの国にも行かないまま長い年月が経った。そして、2013年の夏にヨーロッパの主要観光地を訪れることができた。20年ぶりに訪れたドイツで感じた夏のヨーロッパの魅力は、以前の暗い記憶を忘れさせてくれた。

### オランダのヴァーヘニンゲン大学へ

2015年秋学期に長期海外研究の機会

それぞれの経験をシェアする内容だった。ワークショップ後は、典型的なオランダのランチ（サンドイッチ、スープ、りんご、牛乳と紅茶）をしながら、講師と参加者が交流できる有意義なプログラムである。私は、このワークショップ後、その講師が担当する異文化理解の講義にゲストスピーカーとして講義をする機会もいただいた。ほとんどの教職員が英語を自由に使い、英語で行う講義も多いオランダの大学でも、国際化や異文化理解の教育の推進に悩んでいる実態を知る機会にもなった。

オランダに到着したのが8月だったので、快適な天気とサマータイムにより夕方遅くまで明るい夏の魅力を楽しむことができたが、やはりサマータイムの終了とともに、暗くて憂鬱な冬が始まった。特にオランダは、暗いだけでなく、毎日のように終日降る雨が憂鬱さを増幅させる。ある留学生からライト付きのアラーム時計があると聞き、私も購入して試してみた。朝になっても明るくならないので、アラームを設定しておく、設定時刻の30分前から段々と明るくなるライトだ。個人

をいただき、オランダのヴァーヘニンゲン大学で Visiting Scholar として滞在することにした。立教大学観光学部で長年兼任講師として、夏の集中講義を担当してくださったクラウディオ・ミンカ教授が Chair Head を務める Cultural Geography Chair Group でお世話になった。

新学期始めは、大学が主催する新しい外国人教職員向けのワークショップに参加した。『Introduction to the Netherlands』というタイトルで、異文化を専門とする教員がオランダの社会や文化について講義をし、参加者もそ

的にはあまり効果があるとは思わなかったが、暗い冬に耐えるため、そのような商品が考案されている。

オランダ人は、オランダの気候についてどう考えているかに興味を持ち、滞在していたゲストハウスのオーナー（農学博士）に聞き取りの時に質問をした。アジア、アフリカ、南米まで海外在住歴が長いそのオーナーは、本当に気にしない表情で、「あまり気にしない」と答えた。そして、聞き取り後に「幸せに対する環境の影響は10%」という研究結果を主張する論文を送ってくれた。しかし、暗い冬に心身の不調が現れる「Winter Depressions」という病気が認定されていることを知った。日本のように寒い冬でも明るく綺麗な青空が見られる環境に慣れている人は、より「Winter Depression」にかかりやすいかも知れないかと思っていたところ、「Winter Depressions」に悩んでいる人に会った。オランダ在住歴が長いシンガポール出身の女性職員が「Winter Depressions」と診断され、冬の間は、勤務時間中に1〜2時間は明るいライトがある空間で過ごすように処方されたそうだ。彼女は、私がいた2015年の冬に、年間の有給休暇をまとめた、年末年始の1ヶ月間をシ



図書館がある建物のロビーで昼休みにミニコンサートをする大学オーケストラ

ンガポールに帰って過ごした。大学キャンパス内のある研究棟は、ガラス張りで作られた中庭があり、各部屋から中庭が見え、光も入るようになっていた。昼休みには、教職員が中庭にあるテーブルに集まって持参のサンドイッチを食べるのが普段のランチの風景である。ちなみに、ランチはほとんどパン類を持参して20分〜30分の時間を取るのが普通である。研究成果の発表会などがよく昼休みの時間にキャンパス内で開催されていて、主にサンドイッチ、パックの牛乳、りんごのランチを提供することが多い。

### 洗濯サービス付きの ゲストハウスで長期滞在

ヴァーヘニンゲンに滞在する間に、二つのゲストハウスで月単位の長期滞在客としてお世話になった。一軒は欧米によくある Bed and Breakfast のタイプで、自宅の2階と3階の部屋を貸し出し、電子レンジとケトル、小さいシンクのミニキッチンはあるが、設備が長期滞在にはそれほど向いてなかった。入学式に来た両親と泊まって、宿のオーナーと仲良くなったというヴァーヘニンゲン大学の学生（カナダからの留学生）が掃除のアルバイト

をしていた。人的なサービスも、物理的なサービスも、特に不満はないが、それほど感動もないものだった。別料金を払うと、洗濯をしてくれるが、乾燥機から出したまま渡された。Booking.com に登録してから、様々な国から予約が入るようになったという。

もう一軒のゲストハウスは、長年ヴァーヘニンゲン大学へ研究に来る研究者を主に受け入れて来たことで、予約サイト等には一切登録せず、登録費無料の BedandBreakfast.com のみ掲載していた。最初にゲストを受け入れたことも、知り合いの大学関係者から依頼され、空き部屋に大学の訪問研究者を泊めたことがきっかけで、10年以上もその口コミのみで常に予約は順番待ちが続いたという。

オーナー夫婦は海外経験が豊富で、自分たちが海外で長期の滞在をしながら感じたことを取り入れて、部屋の設備やサービスを工夫したそうである。男性オーナーは次の3点  
①広めの部屋 ②大きめの勉強机 ③客同士が交流できる大きいキッチンが重要であると話した。研究者の客が多いため、大きめの勉強机は、確かに使いやすいと便利だと感じた。また、オーナーが使用するキッチンよりも広くて、使いやすく整理されたキッチンとテ-

る生活習慣はもちろん、家作りも自然を利用する工夫をしていた（写真1、2）。

ユニークなゲストハウスの運営コンセプトは、オーナーの旅行経験から生まれることが

多く、このゲストハウスは小規模ホスピタリティ施設の研究に重要なヒントを与えてくれた。ホスピタリティ研究の事例として調査対象に考えていたが、オーナー夫婦が65歳に

ブルがあるダイニングルームがあった。

さらに、このゲストハウスが特別に提供していたのは、女性オーナーの強い意思によるもので、別料金なしに毎日洗濯をしてくれることであった。長期の海外旅行やホテル滞りで一番困るのは、実は洗濯である。ランドリーサービスがあるホテルでは、1点ごとに高い料金を支払なければならない。ビジネスホテルの場合でも、コインランドリーもランドリーサービスもないことがある。このような自身の海外経験から洗濯サービスの必要性を確信したそうで、ゲストが快適に滞在し、研究に集中できる環境を提供したい思いで続いていた。しかし、単純な洗濯サービスではない。各部屋にあるランドリーバックに洗濯物を入れておくと、平日は毎日夕方帰宅したら、アイロンまでかけられ、綺麗にたたまれた洗濯物が廊下にあるカゴに置いてあった。初めて戻って来た洗濯物を受け取った時は、申し訳ない気持ちになるほど感動した。ところで、しばらくすると、やはり自分が必要な時に自分で洗濯したくなる。しかし、節約習慣が身についたオランダ人は、洗濯機の使い方も節約型なので、外部の人に洗濯機を使わせてはくれなかった。エネルギー消費を最小限にする。

なった数年から引退を希望していたそうで、今年の春、家を売って宿を閉めた。それでも、宿がなくなる前にお二人に出会えたことを感謝する。



1 枝を曲げながら育て、日差し避けに木を活用したゲストハウス（写真1） 2 秋になったら葉っぱが落ち、日差しがよく入る（写真2）

1 Lyubomirsky, Sheldon, & Schkade (2005), Pursuing Happiness: The Architecture of Sustainable Change, Review of General Psychology, 9 (2), 111-131.

筆者紹介(執筆順)

## 小野良平 (おの・りょうへい)

観光学部教授

1986年東京大学理学部卒業、1989年東京大学大学院農学系研究科修士課程修了、株式会社日建設計を経て1995年東京大学農学部助手、2001年同大学院農学生命科学研究科准教授、博士(農学)。2015年より現職。専門は造園学。主な著書・論文に『公園の誕生』、『森林風景計画学』(共著)、『復興の風景像—ランドスケープの再生を通じた復興支援のためのコンセプトブック』(共著)など。

## 周宏俊 (Zhou・Hongjun)

同済大学(上海)建築与城市规划学院副教授

2004年华中科技大学建築学科卒業、2007年清華大学建築学院修士課程修了、2012年東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了、博士(農学)。2013年より現職。専門は造園学。主な著書・論文に『借景の展開と構成：日本・中国造園における比較研究』東京大学博士論文、『借景的意義』中国風景園林学会誌、『日本における借景庭園の空間構成に関する研究』日本建築学会誌など。

## 松村公明 (まつむら・こうめい)

観光学部教授

1986年慶應義塾大学文学部史学科卒業、1993年筑波大学大学院地球科学研究科単位取得満期退学、秋田大学教育文化学部助教授を経て、2006年から現職。専門は地理学。主な著書・論文に『改革開放後の中国僑郷—在日老華僑・新華僑の出身地の変容』、『日本の地誌4 東北』、『EU統合下におけるフランスの地方中心城市—リヨン・リール・トゥールズ』、『旧サイゴン困窮地区における行政機能の変遷と都市景観の特色』立教大学観光学部紀要(以上共著)など。

## 豊田三佳 (とよた・みか)

観光学部教授

1990年上智大学社会学科卒業、1993年英国ハル大学東南アジア研究学科学修士課程修了、2000年同大学博士学位取得。ハル大学、シンガポール国立大学アジア研究所研究員、同大学人文・社会科学学部社会学科助教授を経て、2012年より現職。専門は開発社会学。主な論文に『Contested Chinese identities among ethnic minorities in the China, Burma and Thai Borderlands』、『Ethnic and Racial Studies』、『The emerging "Transitional" retirement industry" in Southeast Asia』*International Journal of Sociology and Social Policy*など。

## 韓志昊 (Han・Jiho)

観光学部教授

1994年韓国外国語大学卒業、1999年立教大学観光学研究科博士前期課程終了、2005年Virginia Polytechnic Institute & State University (U.S.A.) 博士課程終了、Ph.D. (Hospitality and Tourism Management)。立教大学観光学部助手、立命館アジア太平洋大学助教・准教授、立教大学観光学部准教授を経て、2017年4月から現職。専門はホスピタリティ経営。主な論文に、『エベレスト・トレイルのトレッカーの特徴と現状』、『Who Are the Tourists Motivated by the Korean Drama "IRIS" ?』、『Identifying Leisure Travel Market Segments Based on Preference for Novelty』(共著)など。

---

# 交流文化

17

2018年3月20日発行

発行人 毛谷村英治  
編集人 小野良平  
デザイン 望月昭秀  
印刷 株式会社 八紘美術

---

問い合わせ先

## 立教大学観光学部

〒352-8558 埼玉県新座市北野 1-2-26

TEL 048-471-7375

<http://www.rikkyo.ac.jp/tourism>

---

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

©2018 Rikkyo University, College of Tourism.

Printed in Japan.

ISBN 978-4-9905878-3-3